

第一王子は廃嫡を望む (調整版)

逆しま茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法の才能に恵まれなかった第一王子は色々と悩んだ末に、良かれと思って廃嫡されようとするのだが、どうにも上手くいかず。最後の手段として隣国で廃嫡された王太子を真似て、婚約破棄からの廃嫡コンボを狙っていくのだが…？

目次

- 第1話：出来損ないの第一王子 | 1
- 第2話：第一王子、出会う | 19
- 第3話：第一王子と独りぼっち令嬢
43
- 第4話：人助けしたい第一王子、研究する
72
-
- 第5話：第一王子とその護衛 | 93
- 第6話：引きこもり令嬢、本を読む
111
- 第7話：第一王子と完璧な令嬢 | 125

第1話：出来損ないの第一王子

ラグノリア王国、首都セントリア。

その中心に位置するセントリア城は、大河の中洲にある古代遺跡を中心に築かれた白亜の城である。

故に、その城の基盤に当たる古代遺跡部分には一般の兵士や、貴族たちですら知らぬ部屋や通路が隠されており。そのうちの一つで、魔法のランプを用いた怪しい密談が行われている。

「計画の進捗はどうだ」

上座に座るのは、金髪碧眼——明かりを受けて僅かに輝く瞳は高位貴族の証であり、透き通った王族由縁の蒼色のその青年は悪どい笑みを浮かべていた。それに応える

のは胡散臭い笑みを貼り付けた優男。

「はい、殿下。万事抜き無く、高位貴族を中心に反第一王子の派閥が勢いを増しております。ヴェスパール侯爵家の話が良い呼び水になっているかと」

「すばらしい」

さらりと口にされるのは、本来であればこの国を継ぐはずである第一王子に対する政治的な敵対行為。王族による継承争いであろう発言に、動揺する人間はいない。この場には三人しかいないので当然といえば当然だが、それだけ計画の中枢にいる三人だった。

「主、どうやらヴェスパール侯爵家は親第二王子派ではなく教会派に接近しているみたい」

金髪に通常の碧眼。貴族として一般的な色合いながら、隙のない振る舞いの小柄な少女が小さく手を挙げて補足する。すると、主である青年は小さく鼻を鳴らして呆れた様子で隠さず言った。

「まあ、ああいう輩はいない方がむしろいいだろう。四大公爵家は？」

青年が優男に目を向けると、優男はさして気にした風もなく王国の重鎮である公爵家の方針をさらりと述べた。

「最大勢力たるアグリア公爵家は、やはり北の守護を理由に中立ですね。イルミス公爵家は第二王子支持優勢、ウィンドルム公爵家は第一王子支持優勢、エンデイミア公爵家は不干渉の構えかと」

さすがに国の主軸である四大公爵には反王政、というか昨今の内憂外患の象徴とも言える教会派はいないようで青年もホツと息を吐き。それから僅かに目を細めて優男を見た。

「第一王子派とは、ウィンドルムは正気か？　ロクな魔法が使えない王など飾りにもならないだろうに」

「ハハハ、まあ彼らなりに時勢を読んだ結果でしょう。勿論一枚岩ではありませんので、

切り崩しようはありますが」

「クツクツク、やるなアリオス」

「ハハハハ、殿下ほどではありません」

フフフ、ハハハと完全に悪事を企む笑いを交わす男二人を前に、一人なんとも言えない顔をしている少女が小さくつぶやく。

「そういえば、イルミリスのご令嬢は第一王子派らしい」

「は？」

「おや」

言葉の通り、ひどく意外そうな青年。

言葉の割に、全く驚いてなさそうな優男。

青年は数秒かけて再起動すると、腕を組み直してから真顔に戻る。

「まあ、いい。なら俺が直接第一王子の器を突きつけてやるまでだ」

「それは……効果的なことは間違いありませんね」

「どっちの意味で？」

なんとなく部下二人に生暖かい目を向けられていることに気づかず。主である第一王子、ルーク・ラグノリアはテーブルに拳を叩きつけた。

「もう、父上の優柔不断を放置してはおけない。第一王子は王の器に非ずと叩きつけ、是が非でも王位継承権を剥奪させる！ その第一段階は、極めて順調に推移している」

第一段階、市井においてやりたい放題で権力を振りかざし、悪名を轟かせる。

そのために街に出ては王位継承権第一位という権力をブン回して気に食わない者を貴族だろうが平民だろうが大商人だろうが教会の人間だろうが叩き潰してきた。

しつこいナンパ男（伯爵家）がいれば近衛兵を呼んでしょっぴかせ、普通は暗黙の了解で有耶無耶になるところを王族の権限で無礼討ち……は流石にしないが、視察を邪魔

したという理由で公務執行妨害に。

談合していた大商人からは違約金をたんまりとふんだくって公共事業に投資。

教会の人間が無茶な立ち退きを迫っていた証拠を掴んで大々的に宣伝してやりこ破産にする。

暗黙の了解なんて知ったことか、俺がルールだ。とばかりの振る舞いに高位貴族からは苦情が殺到し、最大宗教である聖童教会の教皇殿下からお手紙が届いたこともあるとか。それはちよつとルークも冷や汗が出た。

ついでに王族の金を好き放題に散財しまくり、『黄金の王子』などという二つ名を持つほどの放蕩っぷり。

なんでこれで廃嫡されないのか、と常々疑問に思っているルークだが、どうせ父上の負い目のせいだろうと解釈している。

『血を継げなかつた王子』、『出来損ない』などと揶揄されるようになった原因には、父が母と大恋愛の末に反対を押し切って結婚したこと、魔法の遺伝がある。

——魔法。それは、血に宿る奇跡。

かつて魔法を使える者たちが人々の生活を支え、集団ができた。それはやがて国となり、魔法使いは王や貴族として人を導くようになった。

その最たる理由が、魔法の才能が遺伝すること。そして貴族同士の婚姻が魔法の才能を長い年月を掛けて高めていくからであった。

だから、貴族は己にふさわしい相手と子を成さねばならない。

それだけが唯一、高貴なる血筋に生まれた義務だと貴族たちは言う。それを破ったのが父であり、その結果生まれたのが母と同じ男爵家並の規模の魔法しか使えないルークだった。

ルークが廃嫡されるべきだと考える理由こそがその魔法の弱さであり。そして、公爵家など高位貴族の権力が揺るぎないものである理由もその魔法にある。男爵家であれば自分だけ、あるいは誰か一人程度にしか作用しない魔法しか使えないのに対し、子爵なら数人から数十人、伯爵なら数十から数百人、侯爵なら数百から数千人、公爵なら万

に届く規模の魔法を扱うことができる。（無論、相手も貴族なら魔法で対抗されるので
そう上手くはいかないが）

国の威信であり、最大戦力であり、積み重ねてきた歴史そのもの。そして血統という
未来に続く商品でもある。それこそが貴族。

だから、ルークは思うのだ。

自分が王位を継ぐことは、いずれ自分と同じ不幸を味合わせることだと。

「国の治世に、親子の情など不要だ。それでもなお、考えを曲げないのであれば
最新の知見に倣おう」

「……最近の廃嫡というと、アレでしょうか」

「？」

何かを察したように遠い目をするアリオスに、小首を傾げるテイナ。

ルークに視線を向けられて、アリオスは若干口元を引き攣らせながら言った。

「つい先月になりますが、隣国で聖女と婚約破棄した第一王子が廃嫡されました」
「主、婚約するんですか」

心なしから先程までより視線が冷たいティナに若干たじろぎつつも、ルークは小さく頭を振った。

「勿論、ただ婚約破棄すればいいってもんでもない。隣国の場合、聖女派がクーデターを起こしたりとか色々あったみたいだが、聖女の実家が居ないと派閥のバランスが崩壊するのが最たる理由みたいだしな」

「我が国においては、イルミス公爵家になりそうですか」

なんとなく、イルミス公爵家の令嬢の顔が浮かぶ。

公爵家の名を背負うに相応しい、怜悧な美貌を思い浮かべてルークは目をそらした。

「リュミエールは、止めよう。絶対協力してくれない気がする」

「第一王子派らしいですからね」

腹心の部下であるティナを疑うわけじゃないが、その情報は本当だろうか。

嫌われていないと信じたいが、好かれる心当たりが無さすぎる。貴族の義務と誇りを擬人化したような完璧な令嬢だぞ。と、ルークは思いつつげんなりした顔で言った。

「第一王子に協力してくれない第一王子派ってなんだよ」

「反第一王子派筆頭の第一王子の方が変では？」

仕方ないじゃないか、誰もやらないから俺がやるしかない。

そんな言い訳を脳内で浮かべたルークは、残るウィンドルム、エンディミアの公爵令嬢たちを思い浮かべて。

『お兄様、婚約されるのですか？ え、わたくしと？ え？ ふえええ！』

『はあ……婚約、ですか。不要です。どうしても、とおっしゃるのなら——わかりますね？』

お兄様、と自分を慕ってくれるウィンドルム令嬢に失望されたくないというわけなしの男心と、果たしてどんな無茶な要求をしてくるか分からないエンディミア令嬢にげんなりとした気分を抱いた。

というかウィンドルムの令嬢、ラティス・ウィンドルムは好きな相手がいると聞いた覚えがあるし。兄貴分としては血の涙を飲んででも応援せねばならない。

「なんで顔見知りになんか無茶を頼まないといけないんだ」

「ははは、殿下の発案では？」

そもそも王族が年頃の高位貴族令嬢と顔見知りでないわけがなかった。

親しい、そこそこな親戚の女の子に「ちよつと婚約と婚約破棄されてくれないか」と頼むのは明らかに罰ゲームである。

「もちろん、詫びとして次期国王になるレオンとの婚約はつけるし、責任は全部こつちで引き受けるが——それで乗ってくれそうなやつ、いるか？」

レオンなら多分「はあ、全く兄上は」と言いつつ引き受けてくれるだろうし、血統厳

選は王族の義務であるので、第一王子を廃嫡せざるを得ないくらいハイレベルな令嬢と結婚してくれば国としてはプラスだろう。ラティがレオンのことを好きなら話は早いのだが。

「ラティってレオンのこと好きだったりしない…かな」

「無いですね」

「無いです」

にべもない。

と、若干顔が引きつってるような気がしないでもないアリオスが問いかけてきた。

「ちなみに、何故そう思われたんです？」

「いやほら、レオンは俺の弟だろう。ラティは俺の妹分だろ。つまり二人は——」

「赤の他人」

にべもない…っ。

雷光の如き切れ味でティナに一刀両断された。

「くつ、レオンに何の不満があるって言うんだ。次期国王で、魔法も良くて顔も性格も良いぞ」

「そういう問題じゃないから（では？）」

まあ確かに、魔法と顔と性格だけで選ぶのではなく相性も大事だろう。

じゃあレオンに合いそうな令嬢を紹介して、レオンを王にするために協力してもらおうというのが一番筋が通ると思う。

問題は国を動かすほどの影響力があつて、婚約者がいなくて、王妃になつても問題なくて、レオンと気が合いそうな人で、協力してくれそうな令嬢が思い当たらないことである。

「普通に考えれば四大公爵家だけだな」

半王家、なんて言われ方があるくらいには名門中の名門。

アグリア家がなければこの国は北の守護を失って、なだれ込む魔獣や異民族で荒れ果てる。イルミス家は西の海での貿易で莫大な利益を上げており、ウインドルム家は飛竜を用いた空輸で物流を担い、エンデイミアは国外にも通じる魔道具関係の最高権威。

失礼をかませば王族だろうとタダでは済まない、それが四大公爵家。

蝶よ花よと大切に育てられると同時に、歴史の積み重ね、血筋と魔法の結晶として丹念に磨き上げられた公爵令嬢とは、それこそ基本的には目に入れても痛くない、公爵家の宝玉だ。

ラテイに偽装婚約と破棄なんて頼んだら、それこそあの恐ろしい「雷嵐」ウインドルム公爵が八つ裂きにしようとするだろう。でもそもそも可愛い妹分のラテイに引かれたら永久に凹む自信がある。

リユミエールはね、うん。やめとこう。

美人は怒らせると怖い。

ヴィーヴィル・エンデイミアは利益によつては協力してくれるだろうが、あの性格的に王妃という立場に欠片も魅力を感じないだろう。よつて、支払うべき利益は莫大なものになる。無理。

と、絶望しているのを見かねてかアリオスは笑みを止めてにわかにな真剣な表情で言っ

た。

「二応、病氣療養中のアグリア公爵家令嬢もおりますが」

「……パーティでも一度も見たこと無いぞ？」

正直、色々合って社交には手を抜いていたのは否めないのだが。

高位貴族とは仲が悪いというか、魔法が明らかになつてから気まずすぎで会っていない。ポンコツ王子として見下されるだろうが、レオンと気が合うかもしれないなら会ってみたいところ。

「何かその病氣の情報は？」

「ご当主であるアグリア公爵が八方手を尽くし、火の魔法に耐性のある魔道具を求められているんですね。アグリアは代々火の魔法の家系、ならば魔法の制御が覚束ないか、あるいは——」

普通に考えれば、制御できないほどの火の魔法に苦しんでいるのだろう。

だが、四大公爵であるアグリア公爵が手こずるほどに？ 戦場で鍛え上げられた、あの白銀の熊とも称される精悍な公爵の顔を思い浮かべて、ついでにこれまで市井で見えてきた問題なども思い返ししながらルークは言った。

「アリオス、その令嬢の特徴って何か分かるか？」

「……父譲りのプラチナブロンドの髪に、夜明け前のような紫の瞳が美しいと。ただ、一度のみ出席した未成年向けのパーティーでは見るに堪えない姿だったとも聞いていますね」

それを聞いて、ルークは天を仰いだ。

なんとなく、疑問の一つが解消されたような気がした。

「とりあえず行ってみるか。で、アリオス。一つ頼みがあるんだが——」

……

……

……

で。

今、何故か、ふつかふかのソファに座って、膝の上にちみつこい令嬢を乗つけて滂沱の涙を流して人目も気にせず号泣するアグリア公爵と向かい合っていた。

「う、う、お、お、お、この、この、だびばまごどに」

やや窶れた風もあるが、間違いなく王国でも最強を争う魔法の使い手にして防衛戦の名手——なのだが。最早何を言いたいのか、感謝されてるのか怒っているのかも判然としない。いや、多分怒っていないとは思うが。

なんでこんなことになったのやら、
と
思い返すべきはおそらく数年前のこと。
全
て
が
始
ま
っ
た
日
の
こ
と
を。

第2話：第一王子、出会う

「——そうか」

分かつてはいた。

王として、選ぶべきもの、切り捨てるべきものがあるのだと。

ただ愛する者と添い遂げたいという想いが、子を、そして妻をも苦しめてしまうかもしれない、分かつていながら選んだ。

王とは、血筋によって成る。

その理由は単純で、魔法が遺伝するからである。一人に一つだけ与えられる魔法、それが強いものが貴族となり国を興した。

そして古より時間をかけて練磨され続けた魔法は、人間の生活圏を広げ、魔獣を駆逐し、大陸の多くの地域を人々が行き交うようになった。同時に貴族の魔法は強力になり、かつて火を起こす程度だった魔法が今では山を吹き飛ばす程にもなっている。

だから、血を練磨することは貴族の義務である。

よりよい魔法を、より強い魔法を。それを以て国を守護することこそが貴族の、その頂点に立つ王に求められるもの。

だが。

どうしても手放したくなかった。

自分を癒やし、諭してくれた女性を。

側妃などに押し込められなくなった。

半平民などと揶揄される男爵令嬢を正妻とする。臣下の大反対を押しつけ、その正しさを証明するべく必死に働いてきた。

その結果が、就任前と比べてもそれなりに豊かになりつつある自国と。妻の男爵令嬢らしい『触れた相手を治癒する魔法』を明確に引き継いだ長男の『己を治癒する魔法』で

あつた。

弱い魔法では国は守れない。内憂外患を誘発し、臣下も国民も納得はしないだろう。まだ王が若いために時間はあるが、長男を後継者候補から外すしかない。二つ年下の次男も駄目ならば、側妃を娶るしかない。

「私は——結局、何の罪もない息子と妻に負債を押し付けねばならんのか」

長男は、物覚えも良く将来を嘱望されていた。

大体の子どもが魔法を使えるようになる10歳を過ぎても魔法がなかなか発現しないこと、そして妻の血筋が不安視こそされていたが、書に優れ、剣を振るい、魔法さえマトモなら一廉の王になるだろうと言われていた。今では、過去の話だが。

「いかが致しますか。四大公爵のうちアグリアを除く三家には年頃の娘もおりますが……」

言いにくそうに切り出すのは、先代から仕える宰相であり——国のため、確実性を取るのなら側妃を娶れという催促だった。あるいは彼からでなければ、こんな状況でなければ、激怒していたかもしれない。

かつて竜の血を受けたとされる王家の者、その王家の血を分けた高位貴族は不思議と愛が重い、というか配偶者を殊更大切にする傾向があった。王に言わせれば歴代の王より自分の方が妻を愛している、と大声で宣言するが。

「……………まだ、決まったわけではあるまい」

「遅ければ遅いほどに、傷は深くなります」

「だが、傷など無いに越したことはない」

「分の悪い賭けですな。……………では、あらかじめ条件を決めておきましょう」

この王のことである、念書でも書いておかなければあれやこれやと理由をつけて後回しにしかねない。三度目の出産からは子の魔力が減衰する傾向があることから、王に近い魔法が遺伝するまで王妃と子作りするのも現実的ではない。

「レオン殿下の魔法が王に相応しいものでなかったのなら——側妃を娶っていただきます」

「…………ぐぬぬ」

「嫌そうなお顔をされようとも、これ以上はどうにもなりませんぞ。むしろ、臣下からは今すぐ娶れとせつつかれるでしょうに——理はあちらにあるのですぞ？」

「…………ぐぬぬぬぬ」

今にも駄々をこねそうな王に、冷たい視線を向ける宰相だが事実としてかなり譲歩している、というか王のために臣下を説得するつもりであるので王も何も言えず。がつくりと項垂れた王は、ぽつりと呟いた。

「…………私は、情けない父だな」

「……………陛下」

「根拠もなく、愛さえあればなんとかなると、してみせると思っていたのだ。だが、愛する妻の血を引く息子に王位を渡せず、王族でありながら男爵並の魔法しか使えぬあの子は苦しむだろう」

貴族社会というのは、暗闘が絶えない魔窟であり厳格な血統社会だ。

あるいは先祖返りでその子どもであれば王に近い魔法を発現するかもしれない息子だが、それでも上位貴族には敬遠されるだろう。かといって下級貴族にも相応しくない。

魔法も、人も、権力も与えることができない。

なら、何をしてやれるのだろう。

「……………せめて。あの子が望むものがあれば」

——俺は恵まれている。

十年來の平穩を謳歌し、繁榮するラグノリア王国に生まれ、賢王と讃えられる父、優しい母、可愛い弟がいる。

平民のように日々の糧に悩まされることはなく、他国のように戦に怯えることもなく、不作もここ数年は起こっていない。

——俺は恵まれている。

剣も、勉強も、努力しただけの力が身についた。
そして何より、努力するだけの環境と余裕があった。

——俺は、恵まれていた。

例え、母の血筋を蔑む奴がいても。俺が努力して、
“王の素質”とやらを見せてやれば黙らせることができた。

騎士の家系にも勝る剣技を、文官の家系にも劣らぬ知識を。

誰よりも努力すれば、誰にも負けはしないのだと。

無邪気にそう信じていた。

ある日、剣の修練中に怪我をした。

それなりに大きな怪我であり——だが、止血しているうちに塞がった。

母の回復魔法を見ていたのだが、すぐに分かる。回復系統の魔法が発現している。

これももし仮に、高位貴族らしく周囲の人間も回復できるのならば何の問題もなかった。が、回復できるのは自分だけ。

爵位が大きいほどより広範囲に作用する魔法が求められる貴族としては最低限の、それこそ母の出身である男爵家並の魔法だった。

それまで周囲にいた人間は、皆居なくなつた。

分かっている、つもりだつた。

俺が時期国王候補だから、取り入ろうとする人間がいる。それが男爵家並の魔法だなんて良い笑い話だろう。絶対に後継者には、王にはなりえない。

一気に静かになつた周囲に、聞こえるのは哀れみの声くらいだ。

『ああ、お可哀想に。だから、男爵家の血筋なんて相応しくないと云つたのに』

『魔法さえマトモなら、立派な王になられたでしょうに』

『まあ、これでこんどはちゃんとした令嬢が選ばれるだろう』

——
俺は。

俺が、王に相応しい魔法を受け継げていれば。

母さんを苦しめることもなかったのだろう。

母さんは臥せっていることが増えた。隠れて泣いていることも。

父さんは申し訳無さそうにしながら「好きなようにしていい」と言うが、なまじ王になろうと努力していたせいで趣味も何もない。剣の師匠に頼んで本格的に修行を受けてみたりもしたが、結局のところ王の息子という血筋があるために迂闊に戦場に出ることも、旅をすることも望ましくない。それが分かる程度には政治を学んでいる。

俺は、どうすればいいんだろう。

剣で身を立てることはできない。

勉強で身を立てるには、血筋が邪魔をする。あまりにも弱い魔法と、王族という国で一番の血筋という不一致は国内の貴族のパワーバランス的にも腫れ物扱いだろう。

何もできない。

俺は、俺が学んできたことは何の役にも立ちはしない。

何もしなければいい。何も。邪魔にならないように、ただ息を潜めて。教会にでも入って、祈りを捧げる。そんなところが似合いだろう。

『不貞の子だから魔法が弱いのではないか』

『王を誑かしただけあって、見目だけは悪くない』

『なぜ新しい王妃を、側室でもいいのに娶らないのか』

優しい母さんなんだ。

いつも穏やかで、怒ると怖いけれど。

父さんのために必死になってマナーを学んで、相応しくなろうと努力したのだとメイド長が言っていた。

父さんも、母さんのために必死に王としての器量を示そうと戦場でも政治でも活躍したと、普段は厳格な執事が誇らしそうに言っていた。

——俺は、どうすればいいんだ。

何もできない。

国のために貴族が、王がいるのだから相応しくない者は王になるべきではない。勉強にも剣技にも身が入らず、それでも良いと休みを与えられて。

何にもなれない俺は、何を目指せばいい。

俺は、何のために——。

風の強い日だった。

雲が川のように流れていき、木々の揺れる音が耳に響く。

誰もいない王城の庭の隅で、空を眺めていた。

あるいは自害でもすれば悩むこともないのかもしれないが、そんなことをすれば母さんはより一層自分を責めるだろう。

何も望まれない。

何もできはしない。

なら、何をすればいい。

何のために頑張ればいい。何ならしてもいい。何を、していればいいんだ。

「俺は、どうすればいいんだ」

思わず溢れた弱音に、自嘲の笑みを浮かべる。

王に相応しくなろうと、弱音を見せないように生きてきた。けれど王になれなくなつたら、このザマだ。結局のところ、王の器ではなかったのか――。

「こんにちは」

穏やかな声でした。

鈴でも鳴らしたような、ひどく綺麗な声だった。

陽の光を浴びて輝く色素の薄い髪に、寶石のように輝く瞳。

小柄な、とはいえ自分よりは幾らか年上なのだろう少女は見覚えのない意匠の礼服を纏い、こちらを見下ろしていて。

「……………弟のレオンなら此処には居ないぞ」

「いいえ。ただ、元気がなさそうだったので」

元気？

こんな状態で元気があるなら、それこそ器だけは王様級かただの底抜けの馬鹿だろう。

高い魔力で薄く輝く瞳。明らかに高位貴族だろう少女の目的を考えようとして、馬鹿らしくなる。

「悪いが、他人に構う余裕がない。放っておいてくれ」

「そうですか」

もしかしたら、善意だったかもしれない。

だが、こんな出来損ないの王子に構って何の得がある。善人なら相手が傷つき、悪人なら俺が傷つく。

黙って目をつぶると、少女はどこかにいなくなり。ほんのわずかな寂しさと感傷とともに、ただ流れていく雲を眺めて——。

「——というわけで、アップルパイを焼きました」
「は」

湯気の出るアップルパイを皿に載せて、無駄に笑顔で少女は戻ってきた。

それを胡乱な目で見返すが、なぜか少女は嬉しそうにしたまま、「どうぞ」と皿を差し出してくる。ご丁寧なフオークも添えて。

「……放っておいてくれと言ったはずだが？」

「私、そうですかとしか言っていないんです」

にこにここと、こちらの無愛想な態度など気にも留めていないのか堂々とした態度に何故か納得させられそうになる。いやまあ、仮にも王族に対してこんな態度を取って許される令嬢がいるのかというところ果てしなく疑問だが。とはいえ自分はこのザマなので王族失格な自覚はあるし。悪意で貶してくるのならまだしも、これでは怒る気にもならな

い。

「悪いが、何が入ってるか分からないものは——」
「リングゴですか？」

ご丁寧に自分で一切れ食べて見せた少女は、毒が入っていないことを証明し。そのまま違う一切れを押し付けてきた。

「はい、あーん」

「……………お前、強引すぎないか」

すると、少女はどこか懐かしむように目を細め——とても幸せそうに笑った。透き通るような、綺麗な笑みだった。

「時には、その方が良いことを知っていますから」

「……………なんだそれ」

思わず見惚れてしまったのを誤魔化すように目をそらして。そうしている間にほとんど口元に押し付けられたフォークからは無駄にいい匂いがする。どうせ王もなれないのだし、毒ならある程度魔法が効くだろうと半ばヤケクソで口に運び――。

サクサクとしたパイ生地、中はふんわりと。甘いシロップで仕上げたりんごが口の中に染み渡る。出来たてだったのか、熱くて少し火傷しかけたが。

「……………うまい」

つい眩いから、なんとなく負けたような気がして悔しくなり。

花が咲いたように、本当に嬉しそうに微笑む少女にそんな気持ちも吹き飛ばされた。

「本当ですか！ 良かった、自信作なんです。でも、その……………まだ、食べてもらったことが無かったのよ」

本当は、ちよつとだけ心配でした。なんて言いながら本当に嬉しそうな少女は、先程までの令嬢らしい毅然とした雰囲気から一転してただの少女のようで。

「そうかよ。良かったな、多分大体の奴は喜ぶだろ」

「？」

「だから、味の感想が聞きたかったんだらう？」

それでこんなところで転がってる暇人に食わせてみたんだらう。

そうでもなければ、こんな役に立たない、政治的爆弾になんて関わっても仕方がない。

そう思っていたのだが。

少女は割と不満そうな———というか思い切りジト目で見つめてきた。

「私は、貴方を喜ばせたかったです」

「はあ。それで、何の得があるんだ？」

弟でも紹介してほしいのか、と言いかけたが本気で不服そうな少女の圧に負けて口をつぐむ。そして少女はちよつと考えた後、自信アリげに言い放った。

「――私が満足します」

「……………」

と、少女は「これは受け売りですが」と一言前置きしてから言った。

「『眼の前で辛気臭い顔をされてるより、笑顔の方が気分がいい。理由なんてそれだけでいい。笑顔にできるなら、報酬なんてそれだけでいい』」

「……………そんなのができるのは、よっぼど恵まれた暇人くらいだろ」

綺麗事だ、と言外に切り捨てた。

少女は気分を害するかと思いきや、何か懐かしいものでも見るかのように笑みを浮かべて。

「そうですね、そして私は恵まれた暇人なのです」

怒るでもなく、不満そうにするでもなく。

ただ幸せそうな少女に言い返せる言葉もなく。

ただ、少し。その在り方が眩しく見えた。

「でも、人を笑顔にすることはすごいことですよ？」

「そうかよ」

もう何も言うまい。

不貞寝の構えを取ったところで、少女はちよつと拗ねたような声を出した。

「……ここは『俺もやってみようかな』というところでは？」
「なんでだよ。俺は——」

そんなことをする暇はない、と言おうとして果てしなく暇をしていたことを思い出した。

「が、澄まし顔でこちらを見ている少女に領いてやるのは認めがたい。よって、無視することにした。」

「……ところで、私のお父様ってどんな人だと思えますか？」

「はあ？」

無視するには、あまりにも話題が唐突すぎた。

こんな変わり者、何の役にも立たない王子にアップルパイを焼く令嬢の父親なんだから、さぞ……お人好しな……。

「……………お前」

「令嬢の嗜み、です」

理由はどうかあれ、助けられた側の印象は一つだ。

何の得もない——そう、何の得もないはずだった。が、現に自分は今「話くらい聞いてやるか」という気分させられている。ついでに、コイツの父親とやらも悪人ではないのだろうかと思ってしまう。

なら、俺もそれをやれば？

何の役にも立たない王子の母親と、人助けして回る変人王子の母親なら、印象はどう違う？

面倒極まりない上に、何の得もない。

うまくいくとも限らないし、失敗すれば逆に評判を下げかねない。

けれど、このまま腐っているよりは、まだ——。

「——まだ、礼は言わないからな」

「お礼なんて要りませんよ? ——だって、私は」

何かを懐かしむように、少女は空を見上げながら何かをつぶやいて。

風に流されたその言葉を、俺は結局知ることにはなかった。

第3話：第一王子と独りぼっち令嬢

——俺は、王にはなれない。

文武両道だろうが、政治を学ぼうが、知略を磨こうが、血統により魔法を磨くという貴族の在り方に反しているのだから打つ手がない。

が。母さんが悪く言われて黙っているのは我慢がならない。父さんはまあ、母さんと違って周囲に何も言われてないんだから頑張ってほしい。

で、先頃出会ったおせっかいな少女を参考に、することのない暇人なのをいいことに地道な奉仕活動で評判を上げる作戦を立てたのだが——。

「……………これは無謀だったかなあ」

評判をあげられるのなら、直接的に母さんの周囲に関わりそうな高位貴族とかから……と思いい、ちようど今夜開かれる貴族の令息・令嬢向けのダンスパーティー（デビュー前なので実質ただのお茶会）に出てみたのだが。

メイド長とかから止めておいたほうが、と遠回しに止められたのも、むべなるかなと言ったところ。

一応名目上はダンスパーティーじゃなかったわけ？　と言いたくなるような空気の死に具合である。

そもそも身分の高い人間が最初に踊るのだが、こういう場で一緒に踊るといのはそれなりに意味がある。仲がいいアピールとか、婚約者候補とか。で、家柄だけはいい王族がいるものだから困っているところか。

執事長にスパルタで鍛えられただけあって自分のダンスの腕はなかなかのものだと自負しているし、これまでは申込みが殺到していたので完全に甘く見ていた。

いや、単純に見込みが、考えが甘すぎたのだろう。分かっていたはずだ、自分は結局のところ厄介者の出来損ないでしかないのだと。

綺羅びやかな飾りも、豪勢な料理も。

誰も彼もが関わりを避けるように俯いているせいでどこか輝きがくすんで見える。

実質男爵家並の魔法しか無い王族とか、政治的爆弾すぎて誰も触れたくないのだから。というか仮に誰かに話しかけたら迷惑がられかねないし、これ以上この場にいても空気を悪くするだけなので中座するしかない。

(よく考えなくても評判最悪の状態からじゃ評価上げも何も無いな)

慈善事業の対象は高位貴族じゃなくて、もっと困ってそうな上に自分のことを知らない平民とかから始めるべきだった。失敗したものは仕方がないので、次に繋げるしかない。

見慣れたダンスホールを抜け、庭園に出る。

庭園に出てすぐは明かりも多く、気分が悪くなった人が風に当たるための椅子やテー

ブルを並べてある。そこはやはりというか、かなり人が多い。露骨に視線を逸らす、これまでは仲がいいと思っていた侯爵家の令息や伯爵家の令嬢になんとなく冷めた気分になりつつも庭園の奥へ。

—— 主に抜け出した男女が逢引する場所だが、今は未成年メインなので誰も使っていない
—— と思っていたのに。

—— そんな場所で、ぼんやりと座っている幼い少女がいた。

月明かりを受けて銀糸のように輝く髪に、夜明け前の空のような紫の瞳。どうにも瘦せすぎではあるものの、白い肌と大きな瞳はどこか雪の妖精のような可憐な印象で。――

—— 野暮つたいドレスと分厚い手袋、妙に数を巻いている気がする魔法防御用のブレスレットが絶望的にセンス……流行の欠片もないせいで物凄く近寄りたいが。

まるで最近の流行なんてまるで知らない父親が、世間知らずの娘が心配すぎて過保護になりつつ送り出したような有様であった。

普通、良家の子女がへんてこな格好をするのはあり得ないので、多分、何かで功績を立てて招待された男爵とかの爵位だと思われるが。

しかもその割に近くに親がいる気配もないので、少女をフォローする人間もない。功績関係で他の高位貴族に呼び出されたのだろうが、最早状況は絶望的である。

俺だったら泣いてる。

少女は気丈なのか、はたまた鈍いのか、泣いてこそいないがどんよりした眼で空を見上げていた。

(……………いや、まあ)

正直、娘にこんなヘンテコな格好をさせる親なので社交関係の力は何も期待できない。なんなら関わったらやはり王には相応しくないとと言われるネタにされかねない。

貴族として、見える厄ネタには触るべきではない。

……とはいえ、なんというか。死んだ魚みたいな眼で空を見上げている、その眼がどこかの誰かに似ているような気がしないでもなかった。

「——お嬢さん、私と踊っていただけますか？」

「……………あ」

驚きからか、大きな眼を零れ落ちそうなくらい見開いた少女はたつぷり5秒以上は硬直した後、きよろきよろと周囲を見渡し始めた。

てつきり親を探しているのかと思いきや、少女はすごく自信なさそうにこちらの顔……よりずっと下、腹のあたりを見ながら言った。

「……………わたし、ですか？」

「まあ、他に誰もいないしな」

別の誰かに話しかけたと思われたらしい。

なんでそんな考えに至ったのだろう、というのが顔に出てしまったのか、少女は先程の落ち込みように戻ってしまった。

「でも……………わたし、変なカツコウって」

……………子どもって意外と容赦ないもんな。

自分もまだまだ子どもではあるのだが、このちっこい少女よりは多分幾分か年上だろう。

「そっか。そのドレスとか、お前が選んだのか？」

「……………おとーさまが、……………って……………くれて」

恥ずかしい、というよりも落ち込んでいるのだろうか。

自分なら「あの親父イ」と悪態の一つでも吐きたくなるが、なんとなく父親のことは好きそうなの少女の場合「父親のセンス無いだけだから気にするな」と事実を伝えると余計に凹みそうである。

「そうか。……まあ、なんだ。良いドレスだしな。どっちかというと、これ」
「……………？ あ」

「ただ肌を隠しときたいのか、とばかりの長手袋（なんかちよつと焦げ臭い）を引っこ抜き、無駄に多いブレスレットも取る。

後になって考えれば魔法の暴走を怖れて必死に防御を固めた結果だと思われたが。

「……………あ、の……………っ」

「大丈夫だ、お前は可愛くなる」

余計な装飾と、野暮つたい手袋がなくなると、やっぱり少女そのものの素材は良さそうだった。もうちよつと肉がつけば可愛いだろう。そのせいで余計に響感を買っていたのかもしれない。

素材はいい。数年後はきつと美人になるだろう。その片鱗は見えているわけだし。

「後は踊れば完璧だな。そして俺は控えめに言ってもダンスには自信がある」

躊躇うように手を引つ込めようとする少女だが、ちよつと強引に手を取る。

なんとなく「ときには強引な方が」とかなんとか言っていた少女の顔が過ぎらないでもなかった。

ただ、その小さな手を取って見たらものすごい高熱に思わず手を離しそうになった。とはいえ座っている少女を立たせようと引つ張る形だったので、離れたら怪我させそうなこともあり気合で耐えた。

「熱っ!? お前、熱あるのに根性あるな……見かけによらず」

「……………え。いえ、その……………」

ちよつと痛いくらいに熱いんだが。もうこれ欠席しても誰も……いやまあとやかく言われるかもなあ。招待された立場だと。

とはいえ自分より小さい女の子が耐えているのに、仮にも王族が負けたら恥ずかしいにも程がある。でもちよつと熱すぎるので、一応風邪が移らないように自分に回復魔法

はかけておく。

こんな時、母さんみたいにこの子も癒せたらよかったのに。

そんな感傷に浸りつつも、少女を庭園の真ん中に連れ出す。意外にも足取りはしつかりしていて、まあ思い出づくりくらいに軽く踊るなら大丈夫そうに見える。

「さて、踊れそうか？」

「……いい、んです？」

男に二言はない。

とはいえ、高熱でも頑張る少女のためにしつかりとリードしなくてはならないだろうが。

不思議な感覚だった。

少女とは間違いなく初めて踊ったはずなのに、事実最初はお世辞にも上手とは言えないダンスだったのが、まるで何度も合わせたかのように息があつていく。

実はコイツ、天才的なダンスの才能が……とか益体もない考えが脳裏をよぎるが、多分緊張しすぎて本来の力が出てなかったとかそのへんだらう。

本当に楽しそうに、跳ねるように踊る少女は最初の印象と同じで妖精のようで、踊りきった時の、雪解けの花のような笑顔に——悪くない、と。そう素直に思えた。

母さまは、わたしを生んで亡くなったのだという。

一度も会ったことのない人だけれど、父さまが好きになった人ならきつと素敵な人だったのだろうと思う。

病気だった、と父さまは言う。

でも、メイドが話しているのを聞いてしまった。

わたしが生まれる前から、母さまは急に身体が弱くなって——枯れ木のようになって死んでしまったのだと。膨大な魔力を持つ娘に、全てを吸い取られてしまったかのようなだと。

それは幼心にとてもシヨックで、父さまや仲良くしてくれるメイドも傷つけてしまうのではとても怖くなったのを覚えている。

そして、やはり制御できない魔力は、触れるものを無差別に傷つけた。

なにか恐ろしいものを見るような、メイド達が最初に遠ざけられた。残ってくれた、仲の良かった人たちは、わたしが遠ざけた。

——いつか、きつとまた会えるから。

いつか魔力をしつかりと扱えるようになって、また会えるようになるから。そうしたら、きつと——。

——また、魔力が強くなった。

魔力の暴走による影響は、魔力量に差があるほど大きい。最初は魔力の弱いメイドたちが火傷を負うくらいのものが、徐々に父さまでも手に負えないものになってきた。

年が経つにつれ、月が変わるにつれ、魔力は強まった。

これ以上強くないように、食事を抑えた。すこしだけ、魔力の増える量は減った。いつもお腹は空いているし、手は細くなってくるし、疲れやすくなったけれど。それでもあの、怖いものを見る目で見られたくなくて。食欲も無くなってきた。

——ある日、シーツが焦げた。

もう、人だけでなく物にも影響が出てきていた。

父さまは魔獣の素材を使った特別性の寝具を用意してくれたけれど、このままではいつか屋敷が火事になるだろう。

わたしは父さまに頼んで、屋敷の外れにある塔に部屋を用意してもらった。石造りの塔なら、火事になりにくいしいざという時の被害も少ない。

そうして、父さまは火に耐性のある魔獣の素材を使った服を用意してくれた。わたしの希望で、飾り気のない、貫頭衣にしよう。

分厚い魔獣の革の手袋を付けて、本の世界に想いを馳せるのがわたしの楽しみになった。

三匹の妖精が悪い竜から逃げる話や、悪い魔法の眠りから王子様のキスで目覚めるお姫様の話、魔女を懲らしめる兄妹の話。

素敵だった。

わたしの見れない外の世界、わたしの知らない世界。

読みすすめる度に、わたしじゃない「誰か」になれるような気がした。

触れるものをなんでも傷つけて、燃やしてしまう。痩せ細った白髪の魔女。自分のお母さまを死なせて、お父様を悲しませる。そんな、悪い子。

でも、悪い子だって自覚はあったから。ずうっと大人しくしていた。

これ以上魔力が強くならないように、食べ物減らすのも。新しい本だって我慢した。誰かと、お父さまとお話したくても、迷惑をかけないいい子になろうとした。

そうすれば、いつか――。

「フィリア、ダンスパーティーに行ってみないか」

「……………ダンス、ですか？」

ある日、お父様がそんなことを言った。

頭に浮かんだのは、この前の誕生日にもらった本——ドレスを持っていない娘が、魔女に助けってもらって舞踏会に行つて王子様に出会うお話。

——実のところ、お医者さまに『女の子は10歳くらいで一気に身体と魔力が成長する』と聞いていたから、理由は想像できた。

外に出られなくなる前に、せめて一度くらいは。

そんなふうには父さまが無理してセツティングしてくれたのが、なんとなく分かる。分かつていた。

でも、やっぱり無理だったかもしれない。

なんといつても、まず普段から食事制限しているので可愛げなんてない。枯れ木みたいな見た目に、高すぎる魔力で他の人を傷つけないように魔獣革の手袋（がんばつて薄

くしてくれたけれど」と魔力を防ぐブレスレット、アミュレット、ネックレスなどなど。自分で鏡を見ても、お世辞にも可愛くはない。むしろ怖い。夜に見ると不気味かもしれない。

お父様がいる間は、まだ良かった。

でも、流石のお父様もずっと私の近くにいると魔力に当てられて徐々に体調が崩れてきてしまう。

蒼白な顔色でも笑顔を絶やさないお父さま。

関わりを避けるように引き気味の親たちに、気味悪いものを見るような同年代の人たち。

「——すまない、少しだけトイレに行ってくる。待っていてくれ」

「……はっ」

きつと、いつか。どこか。

我慢していれば、いい子になろうとしていけば。誰かが、何かが、たすけてくれると思っていた。

『……………変な格好』

『何か病気なんじゃないの』

『お化けみたい』

「————こなければ、よかった」

星の輝きは、どこで見ても変わらないはずなのに。

ここから見えるのは、悲しいくらい優しくなんてない現実だけ。大好きなはずの星空もくすんで見える。

いい子になりたくても、もうお母さまを殺しているから。わたしは悪い魔女なんだろう。いつか誰かに退治される、そんな存在。

「でも、さみしいよ」

お父さまに、これ以上甘えられない。苦しめたくない。
お母さまに、会ってみたかった。

だから、最初にその人に声をかけられた時——夢だと思った。

好奇心からでも、哀れみでもない。

ただ、何かわたしの知らない温かい光を湛えた眼。

「お嬢さん、私と踊っていただけですか？」

「……………あ」

つい、周囲を探してしまふ。

知らないうちに自分の後ろに誰かいただろうか。いない。でも知らない人に声を掛けられる心当たりもなくて。

「……………わたし、ですか？」

「まあ、他に誰もいないしな」

それはそうなんです。

でも、こんな格好で、こんな……………自分で言うのもアレですけど、可愛くないですし。

「でも……………わたし、変なカツコウって」

迷惑じゃないだろうか。迷惑だろう。

けれどそんなことは知らないとはかりに、その人はどこか遠くの方を見て。それがなんとなくお父さまに似ているようにも思えた。

「そっか。そのドレスとか、お前が選んだのか？」

「……………おとーさまが、たのんで……………つくって……………くれて」

特注品です。

魔力のせいで燃えたりしないように、魔獣素材をなんとか合わせようとしてくれた……………らしい。お父さまは気を遣わないように何も言ってはくれないけれど。

「そうか。……………まあ、なんだ。良いドレスだしな。どっちかというと、これ」

「……………？ あ」

火傷させないように着けていた手袋が引き抜かれる。

「……………あ、の……………っ」

「大丈夫だ、お前は可愛くなる」

余計な装飾とばかりにブレスレットが止める間もなく引き抜かれる。

考えてみれば、誰もわたしのことを知らない人はいなかった。みんな——お父さまでさえ、気をつけながらわたしに触れていた。

だから、だろうか。

今だけでも良い。物語のお姫様みたいに、怖がらずに誘ってくれたこの人と、踊ってみたいと思ってしまったのは。

駄目なのに。

すぐに逃げないと、また怖いものを見る目で見られてしまうのに。

それでも、信じたいと思ってしまう。

わたしは、独りじゃないと思いたくなってしまう。

「後は踊れば完璧だな。そして俺は控えめに言ってもダンスには自信がある」

そして、ちよつと強引に手を取ってくれて。

ちよつと不思議そうにしたその人は——元々の魔力量が多いのか、ちよつと驚いたような顔をしたものの、何故か優しい目でこちらを見てきて。

「熱っ!? お前、熱あるのに根性あるな……見かけによらず」

「……………え。いえ、その……………」

むしろなんで大丈夫なのだろうか。

お父さまと同じようで、ちよつと違う。わたしの知らない目。

「さて、踊れそうか?」

「……………いい、んです?」

今だつて熱くてたまらないはずなのに。

なんでもないような顔をしてその人は踊りに誘つてくれて。

今更ながら、ほとんど空想の中でしかダンスを踊ったことがないのに気づいたけれど。

そんなわたしの拙い足運びなんて気にしていないみたいに、踊りは始まった。

「——っ」

「ゆっくりでいいぞ」

慎重に、緊張でカチカチになってしまった足を動かす。

ちよつと足を踏んでしまいそうになり、こわごわ顔を上げると、とてもおかしそうに笑われて顔が熱くなる。

「緊張しすぎ。どうせ誰も居ないんだ、楽しくやればいい」

「……は、い」

足どころか、口も、舌もカチカチだったけれど。
でも——楽しい。

知らない人なのに。知らない場所なのに。

知らないことダンスなのに。

話をしてくれることが楽しい。笑い合うのが楽しい。

目を合わせるのが、歩調を合わせるのが、まだ全然形になっていないはずの踊りなのに、楽しい。

少しずつ、ステップが揃ってくる。

少しだけ、顔を上げる余裕が出てくる。

ニヤリ、と不敵に笑うその人につられて私も笑って。

「いいぞ、じゃあ少し早くいいこう」

「はいっ」

（——ずっと、こうしていられたらいいのに）

集中しているからだろうか。

そんなことを考えると不思議と、世界がゆっくり動いているように思えた。

足運び、目線、指先の動きまで。

よくよく見てみると細かなところまでしっかりと振り付けがあつて。のめり込むように、わたしは踊った。

楽しくて、終わってほしくなくて——。

会場の方から聞こえてきていた音楽が鳴り止んだ時、感じたのは達成感と、寂しさだった。

(……………わたし、もっと——)

踊っていたい。この人と、お話したい。

そんな思いが、形を結ぼうとした時。

「これやる」

首に掛けられたのは、銀で竜を象ったブローチ。

聖竜教会のシンボルであり、よく童話では魔法のアイテムとして扱われるアクセサリ……………をモチーフにしたもの。

小さな青い宝石がキラリと光って、なんとなく見とれてしまう。

「厄介払いにはなる……………はずだ。まあ駄目だったら隠しといてくれ」

「え。でも——」

こんなの貰えない、融けてしまうかもしれない。

そう、言おうと思った。でも、わたしがそんな化け物みたいな体質だなんて言いたくなくて。

「気になるなら、また今度。また会えた時に返してくれればいい」

「……あう」

また、会えるんでしょうか。

きつともう会えない。そんな言葉が口の中で押し合つて、結局出てきたのは上手く音にならない呻き声みたいになつてしまつて。

「——しっかり休めよ」

「……お元気で」

もう、会えないとしても。

それでもこの出会いは忘れない。忘れたくない。

そんな思いで去っていく背中を見つめながら握ったブローチが、きらりと青い光を放った。

第4話：人助けしたい第一王子、研究する

石造りの無骨な建造物。無数の魔道灯が並ぶ異質な明るさのあるその場所を、やや顔色の青白い白衣の男の案内で歩く。

中で働く人間は忙しそうに立ち回っていたり、あるいは真剣に考え込んでいたり。髪色も貴族の金や平民の黒まで纏まりはない。ただ、一律で白衣を着ており、身分に関わらず喧々譁々の議論を交わしている者もいる。

この場所では身分よりも重んじられているものがあるのかもな、となんとなく考えつつも今回は必要なことなので気まずく思ったりはしない。無いっただけ無い。

「……………」ちらです」

「案内ご苦労」

ルーク・ラグノリアは父王に強請り、王国の東。魔道具研究の最先端であるエンディ

ミア公爵家の領土にある研究所に押しかけていた。

理由は単純で、最新の魔道研究なら自分の残念極まりない魔法を何かの役にも立てられないだろうかというところである。

一応、ルークも王族である。魔法という消費量のシヨボさに反して魔力の総量は王族らしく立派なものだったりする。本来なら魔力の総量の湖の水量、魔法を川の大きさと表現すべきところを、海からバケツリレーで水を運ぶような貧弱ぶりだが。

だが自分で放出できないなら何か別の方法がないか、というのが人情である。

基本的に魔道具は魔力さえ込めれば誰でも効果を発動できるので、大出力で燃費の悪いが強力な魔道具があればルークの魔法の貧弱さは解決できなくもない。結局の所、遺伝のために魔法が必要なので王族として失格なのは変わらないが。

とはいえ、忙しく働いている大人たちの邪魔をするのはさすがに気まずい。こちららなんとか評判上げをしようとしているのだから尚更である。

そんな時に目に入ったのが、何やら機械と布地を前に悩む茶髪の少女だった。ダボダボの白衣を纏い、ぶつぶつと呟いており何やら不気味だ。

「——ダメ。これじゃ冗長性が足りない。きちんと付与はできているけど、これ

「じゃただ劣化しにくいだけ」

手元にある布は、どうやら魔道具のようだ。まあ魔道具の開発室にお邪魔したので当然といえば当然だが。何の変哲もない黒い布に、光る文字が浮かんでいる。

「成程、魔法付与か。特殊効果……地属性、じゃないな。闇属性？」

パツと見では変な記号がつつらと並んでいるだけには見えないが、かつては竜が用いたとされる古代文字である。で、専用の加工を施した布に上手く魔力を流すと、魔法を文字として刻印できるのである。じわじわと滲み出るので、相当な手間と時間がかかるが。

一応、特定の文字列を打ち込みさえすれば同じ効果は得られることも分かっている。手縫いで文字を刺繍しても魔力さえ込めれば魔道具は発動する。よって文字の意味から大凡の効果くらいは予測できなくもない。

ルークも立派な王になるために学んだことがある。王なら城にある古代文字くらいは読めないという理由で。

「わかるの？ ……誰」

パツ、と振り返った少女だったが、見知らぬ、しかも同年代と見て露骨に顔を顰める。が、それくらいの悪感情なら慣れたもの……というか、純粹に年齢から不審に思われるくらいなら何ともなかった。

「地属性の恒常性と、風の停滞を示す文字列、か？」
「……………タダの冷やかしにしては、詳しいですね」

自分も年齢で苦勞しているからこそだろうか。
露骨に刺々しい少女だが、多分実力は確かだろう。他の研究員よりは暇そう、という
か行き詰まっていると見て質問をぶつけてみた。

「少し知恵を借りたいんだが」

「……………わたし、暇じゃありません」

「やけに防御型の魔道具を着けていて、やたらと体温が高いのって何か病気だと思うか？」

「はあ？」

無茶振りでもされると思ったのか、拍子抜けしたと言いたげな少女は興味なさそうに視線を戻しつつ言い捨てた。

「高魔力症ですね。成長期の、特に魔力を溜め込みやすい貴族令嬢に多いです。特に火属性の家系とかだと年中体温が高いとか」

「治療法は？」

「無いですよ、そんなもの。火の魔力を遮断するブレスレット一つでなんとかなるんです、治療する必要もありません」

「もしそれでも治らなかつたら？」

知りもせず一々突っかかってくる、と思ったのか少女は露骨に気分を害した顔になり

——ルークの表情に何を見たのか、深い溜息を吐いて言った。

「やはり遮断具を使うしかないでしょう。火の魔力を確実に遮断してくれる魔道具ですよ？ 多くても2個付けてやれば理論上なんとでもなるはずですよ」

「そうか」

まあ専門家が言うなら信じるしかない。

ならあの少女はどう考えるべきだろう。確かにあのダンスパーティーでは悪い思い出ししないでやることに成功したと思っっているが————実のところ、何も解決していない。

俺が慈善事業をやる切っ掛けになったあのお節介令嬢は、俺に『善行による評判上げ』という今後の解決策も残していった。だから今行動できている。それなのに自分はその場限りの慰めをしているようでは何にもならない。

今の自分でも、あの子のためにできること————王になるべく、論理的な思考も一

応は学んでいる。ので、問題が解決しないことをどう考えるべきか。

問題が解決しない。なら、原因が間違っているか、あるいは問題点を正しく把握できていないかだろう。

あの少女は、多分火の魔力が暴走していると推測できる。理由は物凄く高熱だったから。

問題点は火の魔力だから、それを遮断すれば解決するはずである。けれど解決していない。

火の魔力が遮断できていないのでは、と考えたのが恐らく彼女の親。だからやたらと魔力防御のブレスレットや、魔力を遮断できる魔獣素材の衣類を着けていたのだろう。けれども、あんまり防げていない。

なら——実は火の魔力じゃない、とか。

なんとなく目に写ったのは、魔道具であるランプ。

明るい白の光を放つそれは、触れると熱い。なんとなくこの前の少女の顔が浮かん

だ。熱いのは、何も火だけではない。

「もし、火じゃなくて光の魔力とかだと？」

「——はあ？」

物凄く胡乱な目で見られた。

馬鹿じゃないのコイツ、という目だ。若干ムカツときた。

「——あ、悪い。分かんないなら無理しなくていいから」

腹立ちまじりに言い放つと、ビシツと音を立てて少女が青筋を立てた——ような気がした。不健康な色とは裏腹に整った顔立ちなので余計に怖い。

「はあ？ ……はああ？ 馬鹿にしないで下さい。光属性は希少なので魔道具はあり

ません。けどまだ未完成ですが、この魔法耐性布が完成すれば一発です」

「魔法耐性……？」

聞いたことのない理論だ。

魔法というのは、基本的に属性——精霊に由来する地水火風の四属性からなり、派生して地と風から闇、水と地から氷、火と水から光、風と火から雷の複属性がある。

魔力も属性ごとに特性が異なるので、特定の属性を吸収したり弾いたりするのが属性耐性。一般的に護身用に使われる。

しかしあくまで、属性ごとの耐性。

とはいっても魔力由来の炎ならば炎属性耐性を付与した布は魔法では燃えにくい。燃えないわけではないのだが——魔力ごとに波長が違うので、複数の耐性をもたせようとする和不具合が起きる。

「わたしの魔法、『調律魔法』を使えば可能です——理論上は」
「理論上は」

調律魔法……全く聞き覚えがないが、察するに魔法として活性化した魔力の無効化だ

ろうか。

魔法というのは、体内の魔力を空气中に存在する精霊の力と反応させて発現する、あるいは精霊に発動してもらっているとされている。つまり、活性化した魔力こそが魔法であり、時間経過で魔力が霧散すると魔法は効果を失う。

「つまり、魔法を無効化する魔法……？」

「……………察しはいいですね」

じろり、と目線を向けてくる少女は「バラしたら消す」と目で語っている。が、なんとなくこつちの正体を察してもいるのか、すぐに目線を戻したが。

「わたしの魔法は、無差別に魔法を無効化します。それだけならただの剣で競う野蛮な空間を作るだけです——」

「もし魔道具、もつと言うと防具に込めることができれば、味方だけ守れる」

めちやくちや有能である。羨ましい。

狭い谷とかで魔法無効にしてから崖崩れとかを起こせば一撃で敵を封殺できそう。

羨ましそうな目線を察したのか、少女は疲れた顔で手元の布に目線を落とす。

「……………地味で、貧弱なわたしには意味のない魔法ですけれど。それどころか魔法が使えないと迷惑がられます」

「いやお前——はああ」

なんて贅沢な！

その魔法が三分の一でもあれば、俺も悩まなかつただろうに。とはいえ、魔法で苦勞する気持ちはよく分かると思うが。

「……………何か文句でも？」

「俺、治癒魔法だぞ？ 対象は自分だけ」

「……………ああ、噂のガツカリ王子」

「すごい傷ついた」

なんて容赦のない。

が、どうやら目つきからして二人とも「自分の方が苦勞してる」という感じである。

「お前、自分しか回復できないんだぞ？」

「わたし、目に見える効果は何もないんですが」

「はあ？」

こいつ……なんて贅沢な不満を。

互いにそんなことを考えているのが丸わかりだったので、とりあえず話を逸らす意味で少女の布に視線を送る。

「まあいいや。で、どう失敗するんだ？」

「……………なぜ、素人に説明する必要が？」

コイツ…。

心底面倒くさそうな表情に再びイラツときた。

「こちとら善行するついで、無関係で無愛想な少女もわざわざ手伝ってやろうというのにとりあえず子供扱いされるのが嫌いみたいなので、煽ってやる。」

「あつ。……まあ、人に説明するのは難しいって言うしな、出来なくても仕方ないさ」
「……………はあ？」

「ごめんな、俺が悪かった。じゃあ誰か大人の人にも——」
「——魔力を流せば無力化はできますが？ 見てみなさい、これを」

のせられてるのは薄々察していそうながら、煽られるのは我慢ならないようで。少女が布に魔力を流すと魔力文字が光り輝き——そしてどんどん光が強くなるにつれて、布が繊維からポロポロと崩れて、あるいは切れていく。

「土と風属性の魔力過剰——わたしの属性が闇属性であることに由来する現象です。魔力に耐えることは耐えますが、そのまま容量オーバーで終わりです」

なるほど、どんどん増える魔力に入れ物が耐えきれないというわけか。そうすると、思いつく解決策としては——入れ物を大きくしてやるとか。

「外付けの魔力タンクをつけるとか？」

「宝石はたしかに優秀な魔力タンクになりますが、結局の所ある程度防いで終わりです。大容量の宝石なんてお金の前にそもそも現物がありませんから」

まあ、確かに。

特殊な由来の宝石ならまだしも、普通の宝石だと気休め程度だろう。なら、どうするべきか。

魔力はよく水に例えられる。コップから水があふれるのを防ぎたい。コップの大きさは変えられない。水はどんどん注がれていくる。

……一応、解決策らしきものが浮かばないでもない。

ただ、それがうまくいくのかどうかはやってみないと分からないが。水があふれるのなら、放出してしまえばいい。

「じゃあ、別の魔法を組み込んで魔力を消費するのは？」

「……そんなの、最初に試しましたが？」

「どうなるんだ？」

「結局、布が耐えきれなくて終わりです。宝石だとそもそも一つにつき一効果までなので実現できませんし。というかどの属性の魔法も布には不適合です」

そうなのか。まあ確かに燃える布も、濡れる布も、土塗れになる布も、風が吹く布も微妙か……勝手に風に靡く布とかカツコ良さそうだが、出力が強いと大変かもしれない。

だが、この場合一つ考えてみてもいいものがあるのではないだろうか。

「……回復魔法とかは？」

「——布って、回復します?」

実のところ、回復魔法って何なのかよくわからないものだったりする。

水属性由来とか、火属性由来とか、実は光属性だとか、なんだかよく分からないけど便利な魔法、それが回復魔法。一応、現在一番有力なのは人によって回復魔法も属性が異なるという説だったりする。

「わからん。が、分からないということとは——」

「……試す価値は、ありますね」

そう。そして暇な回復魔法の使い手が一応ここにいるわけで。

少女のスパルタ指導の下、魔力刻印の精製作業が始まったのだった——。

「魔力弱すぎです。それで本気ですか?」

「うぎぎぎ」

「はあ、失望しました。やはりガツカリ王子ですね」

「むぐぐ」

「ここ、古代文字が薄い。もっと万遍なくやって下さい」

「小姑かよ……」

で。ほぼ徹夜での失敗の繰り返しの後。

先に少女の調律魔法を入れておくと上手く回復魔法が打ち込めないことが発覚した。

ならば、と後から調律魔法を打ち込むと、先に付与されたものを無効化してしまう。

文字そのものが魔法なので、あっさり文字が消えてしまうのだ。

「うわあああまともにできた刻印が消えていくうううう」

「……………どうしましょう」

思いの外しょんぼりと申し訳無さそうな少女に、仕方なく解決策を出してやる。

……消えるのなら、消えないもので書けばいい。なんなら刺繍してしまえばいいのだ。

「さあ、縫うぞ！」

「……ぬう？　なんですか、それ。わたし、しりません。お針子さんはどこですか……？」

まさかとは思っていたが——コイツ、裁縫できないな。

未知の魔力波でも感知してしまったかのような、謎に無気力な表情をする少女の手を取って縫い方を懇切丁寧に教えてやる。

「……ガツカリ令嬢め」

「——言ってしまいましたね、ガツカリ王子！」

「いたいっ!？」

「ほら、絆創膏」

「ふにゅあ!？」

「痛っ！ お前、自分の指刺しに行っていないか!？」

「不器用で悪かったですね！」

「逆ギレするなよ……」

もう完全に寝不足のテンションで、ギャーギャー喚きながら二人で布を奪い合うように古代文字を刺繍していく。へったくそな手を怪我しないように庇ってやったり、古代文字の綴りについて議論したりしている間にも、徐々に刺繍は完成していき――。

……

……

……

「――できた……?」

魔力を流して、薄い蒼に輝く銀糸。

各属性の耐性布専用の検査機に順番に繋いでみた黒布は、見事に少女の描いたコンセプト通りの結果を導き出した。

結局のところ、なんで上手くいったのかはまださっぱり分からないが。

「で、きた。わたし、もう魔法が使えない子なんかじゃ、ない——っ！」

「よっしゃああ！ ハイ、タッチ！」

「え、あ、た、タッチ！」

少女の頬を流れる一筋の涙は、きつとこれまで溜め込んでいた感情の証で。

ぐしゃぐしゃになった顔はお世辞にも可愛くはなくて、ポンコツ王子からすれば、ひ

どく羨ましいものだし、妬ましくないと言えば嘘になるけれど。

こういうのも、悪くはないかなと思えた。

「ところでこの布……一人分の服くらい欲しいんだが」

「……徹夜して、これだけなの？」

手元にあるのは、ちょうど片手くらいは包めるくらいの布。

対象が幼い少女だとしても全く足りていない量に、ヴィーヴィルはいい笑顔を浮かべたまま横になった。そして眠った。

ルークも限界だったのでそのまま寝落ちし——ほぼ抱き合うような形で目覚めたヴィーヴィルの手で、回復魔法を使う羽目になるのは遠い未来ではなかった。

第5話：第一王子とその護衛

魔法は残酷だ。

あまりにも明確な才能は、気軽に将来を決定してしまう。

母譲りの魔法を得てしまったルーク殿下もそうだが、文官になりたかつたのに攻撃魔法のため騎士にさせられたとか、騎士になりたかつたのに無理だったとか、将来の希望を打ち碎かれることの方が多い。

そう思ってしまうのは、自分もその被害者だからかもしれないけれど。とラグノリア王国でも密かに重要なグレイブ男爵家の娘であるティナは自分の手を見た。

無骨な、豆や傷のある手。

令嬢らしからぬそれは、代々王家の隠密を輩出する家系の一つとして仕えてきたグレイブ家の人間としての証であり、自分を周囲に溶け込ませる印象操作であつたり、軽々と壁をよじ登る身のこなしであつたり、およそ普通の令嬢とは程遠い自分への嫌悪――

—というよりは、目標を失った無力感に繋がるものだった。

ルーク殿下の場合、明確に魔法の効果が王妃様に近いのでまあそういうこともあるだろう。

だがティナは父親が『肉体強化』の魔法、母親が『高速移動』の魔法である。地味で有効、まさしく隠密になるために家系から厳選されてきた結果といえる。

そしてティナは『雷』魔法。

暗闇で仕えばバチバチと音を立てて光るし、人に使えば派手な悲鳴が上がる。その時点で、これまでは期待してくれていた父親から居ないものとして扱われた。なんなら母の不貞も伺われただろう。父親と顔立ちが似ているとかで、結局問題にはならなかったが。

「そうか。ではリリアに期待するでしょう」

それで終わり。

残されたのは地味で、ロクに友人もいないし将来の展望もない男爵令嬢だ。訓練されているので、その気になれば令嬢らしくできるが根本的にしゃべることが得意ではない。

だから惰性で訓練を続けた。

お母さまは私を心配してくれているけれど、家の繋がりには隠密関係のものしかない。派手な魔法を持つ人間は受け取り手がいないと言われても、私にはどうにもできない。

……他家の余り物とくつつけるしかない、なんて独り言はできれば聞きたくなかった。

本当なら感謝するべきなのだろう。

貴族の義務は血統の錬磨、それを果たせていないと言われればその通り。だけれど、私が何をしたというのだろう。私は、なりたくてこの魔法になったわけではないのに。

家には居づらくて、王城にある代々の訓練場所——も、出来れば使いたくなくて。その付近を探していた私は、何故そこが代々の訓練場所になったかを知った。

「雷か。カッコいいな」

鮮やかな金髪に碧眼、王譲りの色彩に柔らかな顔立ちは王妃譲りだろうか。つい最近、『回復』魔法だと発覚した殿下はここ最近の腐り具合とは裏腹に瞳には光があった。

——近くに王族の訓練場があつたのである！ こつそり守れ、ないし主の実力を知っておけということなのだろう。

本来ならば、王族の魔法は強大にして苛烈だ。

さぞ忠誠心や畏怖を抱かせるのには便利だっただろう。あるいは王族が影を選別する意図もあるのかもしれないが。

「隠密には不必要なものです」

そう答えて、自分でも意外と隠密に拘っていたことに気づいた。

いや、いつだって父さま……あの父親が褒めてくれるのはそれ関係のことだったから

だろうか。

普通の令嬢がダンスの練習をしている間に大人に混じって剣術の指導を受けて叩きのめされ、買い物をしている間に山に放り出されて生活させられ、お茶会をしている間に知識を叩き込まれた。

『——よくやったな、テイナ』

『お前ならばきつとこの国の役に立てる』

そう、無邪気に自分の魔法も知らず努力していた日々。

褒められたくて無茶を重ねて、魔法さえ抜けば他の令嬢なんか遅れは取らないという確信がある。

『貴女は私達の自慢の子よ』

『お前ならきつとできる』

悔しかった。

重ねてきた努力も、何もかも無意味だったと断じられるのが、だからこうして今も未練がましく剣を振るっているのだろう。

「そうか。名前は？」

「……ティナ・グレイブです、殿下」

ルーク殿下の表情は僅かに動いた。それでも彼も魔法が分かるまでは優秀と言われた王子だったのだ。グレイブ家のことも知っていたのだろう。

こんな魔法で隠密などバカバカしいと笑うか、あるいは同情されるか。だが、口角を引き上げ、獐猛に笑う王子の言葉はどちらでもなかった。

「ではティナ、俺が思うに派手な隠密も必要だ。月の輝きが周囲の星より目を引くように囿として、あるいは抑止力として。腕が立つフリーの使い手が欲しい」

確かに他より目立つ隠密がいれば、目立たない隠密はより目立たなくなるかもしれない

い。高名な騎士が抑止力になるように、高名な隠密は……いや、もうそれタダの護衛なんじゃ？

そんな思いを視線から感じ取ったのか、ルーク殿下は肩を竦めて言った。

「要は気の持ちようだ。護衛だと思えば護衛だし、隠密だと思えば隠密だろうか？」
「……………そう、ですか？」

そうだろうか。まあ内容的には確かに近い。目立つか、目立たないか。それくらいだろう。諜報に特化した家系ならまた違ったかもしれないが、グレイブ家はどちらかというと武力寄り、つまり護衛にも近かった。

「正直、俺は今全く手元に人材がない」
「……………」

なんやかんやで残ろうとした人もいたが、遠ざけていると聞いているけれど。

確かに貴族における熾烈な勢力争いに巻き込まれても問題ないとすれば、既にそこか

ら弾き飛ばされた、爪弾きものくらいか。

「俺に従うなら、来たるべき時には弟——レオンに伝手を作ってやれるが、どうだ」
「では、一つだけ」

家のことを考えるのなら、すぐに断るべきだ。余計なリスクは背負うべきではない。
自分のことだけ考えるのなら、すぐに頷くべきだ。他にチャンスが来るとは思えない。
い。

でも結局どちらも選べなくて、口をつけて出たのはわかりきったはずの疑問だった。

「……なぜ、私なんですか」

そんなのは、爪弾きもの同士だからに決まっているのに。

少し意表を突かれたような殿下は、なんてことはないように言った。

「元々狙ってた人材がフリーになったんだ、欲しいのは当たり前だろう」
「え？」

元々？ 予想外の言葉に間抜けな顔をさらしていると、殿下は呆れ顔になり。

「お前……自分の評判くらい調べておけ。大人顔負けの剣技だと聞いていたからな、俺も少し調べた。まあ、大半は無駄になったが——」

自嘲の響きは、自分が王の器ではなかったからだろうか。

それでも、その瞳には熱がある。そしてその熱は、今私が必要だと——私だけに向けられていた。

「俺が、お前を一番上手く引き立ててやる」

「わたし、は……」

別に、引き立てられたいわけではなかった。

栄達したいわけじゃない。ただ、期待に応えたかった。でも期待なんてされなくなつて。

「あとお前、気づいてるか？ 雷を纏ってる時、妙に動きが良いからな」

「え？」

言われてみれば、そんなこともあるかもしれない。

やけっぱちになって振り回した剣は、不思議とこれまでにない鋭さがあつた。……もしかして、父さまと同じ身体強化の効果がある…？

「隠密が良ければそうするし、護衛してくれるなら有り難い。ちよつと色々と動き回り

たいからな、戦力が必要なんだ——それなら俺は、お前が、ティナが良い」

努力家は貴重なんだ、とおどける殿下に、もしかすると期待には沿えないかもしれないと思う。この、どこか王位を諦めたような雰囲気この人は私を引き立てようとしてくれているみたいだけれど。

どうせついていくのなら、この人がいい。

私だって知っていた。努力家というのなら殿下も——むしろ、この人をこそ目標に頑張っていたのだ。

魔法が明らかになる前、誰よりも剣を振るっていた。訓練で何度か剣を交えたことは忘れていると、そう思っていたけれど。どうも覚えていてくれたみたいだし。そう考えると胸の中が少し暖かくなったような気がする。

「では、あるじ主と」

「……………固くないか？」

「護衛っぽいでしょう?」

殿下、と呼ばなかったのは決意表明だ。

隠密が主と仰ぐのは一人だけ。人を口説いておいて、そう簡単に投げ渡そうなんてしてもらっては困る。

高貴な王子様よりは、乙女は一途なのだ。たぶん。

……どう取り繕っても、一般的な乙女には程遠いのだけれど。

……

……

……

——というわけで、主に最初に頼まれたのは女の搜索だった。

思わず真顔になったが、曰く魔法で苦勞している人間は助けたいのだという。気持ちは分かる。でもこつちの気持ちも分かって……もらっても困るけど。

プラチナブロンドの髪に、紫の瞳。痩せていてたぶん貴族。魔力過剰症。

隠密候補としてある程度の情報は頭に叩き込んでいるとはいえ、情報が少なすぎる。少なくとも社交界で活躍していれば間違いなく知っているのだけれど。色的には……アグリ公爵家？ いや、仮にも公爵家の娘がガリガリに痩せてるとは思えない。

「あところの布で服を作りたいんだ。特注品の魔力耐性布」

「……………私もお店の知識は無いですが」

まさかの服作成。しかも布から。

尽くされて羨ましいことである。

しかしここは新米護衛として不機嫌を顔に出さないように街へ繰り出し――。

さて。

ところで王都セントリアの、というか社交界の流行というのは豪華なドレスである。

コルセットで締め上げて、重たいがふんわりと広がるスカート。レースで華美に飾り立てられたドレスはお金がかかることもあり、権勢を競うように大型化が著しい。

ところがこの主、何を思ったのかシンプルなドレスをご所望だという。

確かに殿下が下賜するなら表立って馬鹿にできないだろうけれど。特殊素材の布が限られているからではなく（全く無いわけではないが）、単純にその方が好みだとかなんとかか。

……本当にだいじょうぶなんだろうか。

案の定というか、そんなもの作れないと代々王家に仕える職人に断られ、最終的には魔法が使えないドレス職人の下へ。

豪華なレースのあるドレスに、魔法は必要不可欠。あまりにも時間がかかるとか、手間の問題とか。手作業でレースを編むとかしていけば流行に乗り遅れるかもしれない。

なんというか、この人は魔法に裏切られた人を集めて何かするつもりなんだろうか。

え、私にもくれるんですか。

魔法で焦げないように？ ……………うん。やっぱりこの人、けっこうずるい。

ドレスを作る、と言って思い浮かんだのは何時ぞやのお節介令嬢のドレスだった。

最低限のレースに、インナーと透ける布を組み合わせた機能的なもの。夜会といえどレース特盛の印象が強いが————なんとなく流行る気がした。なんとというか洗練されていたのだ。

本気で何者だったのか気になるが、今はまだ何の結果も出せてはいない。結果を出したら礼を言いに行きたいところだ。

ドレスは参考にさせてもらって、裁縫に使える魔法を引き継げなかった老舗のドレス屋長女に話を持ち込んだ。

「作りたいなら、金と素材と注文は用意する。やりたいか、やりたくないか」
「——やらせて下さい。私、どうしてもドレスを作りたいんです」

魔法でレースを編めないならドレスは無理。

それが常識らしい。まさかの王族よりある意味厳しいかもしれない世界である。レースを編める魔法同士で結婚すれば大凡うまくいくらしいけれども。

どこもかしこも魔法、魔法。嫌になってくる。

とりあえず、ティナにもしつかりと実力を発揮できるようにドレスと仕事着を渡さねばならない。……エンディミア公爵家、というかヴィーヴィルに借りが出来てしまいうだがお互い様だと思いたい。なんで死ぬほど裁縫させられているんだろう、俺は。

他に回復魔法の使い手を雇えばなんとかなると、俺もヴィーヴィルも思っていたのだ。その結果が、耐久性で劣る魔力耐性布で。研究成果としてはインパクトが弱いのだとか。

腐つても王族だからか、明らかに丈夫な布が作れる俺にヴィーヴィルはもつと布を作らせようとしてくる。俺もそこそこ量が必要なので作成を続けるのに否はないのだが…。

なんか最近、外堀を埋めようとしてきている気がする。

俺も一応裁縫の職人になりたいわけではないので、公爵への挨拶とかは拒否の一択。

ヴィーヴィルは耐性布を使つて権勢を広げているようで（というか当然ながら大人たちは調律魔法の強さに気づいていたみたいだが）ご満悦なヴィーヴィルは何かと俺を連れ回そうとしてくるのである。

評判上げにはいいかもしれないが、布だからなあ…。

布職人の母親、とか母さまが馬鹿にされはしないだろうか。それはちよつと遠慮したい。

そんな中、とりあえず完成した試作ドレスをヴィーヴィルにも送りつけた。あれでも公爵令嬢なんだから宣伝効果とかありそうだし。広告塔としては是非活躍してもらいた

い。

— そんなこちらの考えを見通したのかどうなのか、布の宣伝をしたいからエスコートするようにとの丁寧なお手紙が。……もうお茶会関係は嫌なんだが、出ないとダメだろうか。

第6話：引きこもり令嬢、本を読む

——ずっと、消えてしまいたいと思っていた。

触れば傷つけるからと誰にも近づかず、近づかせずに本の世界に逃げていた。

それで良いと思つて……いや、きつと気にしてすらいなかったんだ。これ以上傷つきたくないから、何も変えたくないと思つていた。

怖がられたくなかった。気味悪がられるのも嫌だった。

魔法のせいで周りを傷つける自分が大嫌いだった。

でも本当は。本当に怖かったのは、魔法なんて無くてもわたしが何も変わらなかったら。

楽しい話もできないし、見た目も変だし。

どうやったら人と仲良くなれるのかなんて分からない。

本当は魔法のせいじゃなく、ただ自分に何の魅力もないからだっただけ。

鏡に映る、引きつった笑みを浮かべる自分を見て、フィリア・アグリア公爵令嬢はそつとベッドに戻った。

(ダメ。やっぱりやめよう)

ずっと魔法のせいにしていたかった。

それなら、自分は悪くないのだと思いきむことができたから。

でも、分かっているから。

今の自分が人に好かれる要素なんて無いって。いじけて本を読むだけで、お父さまに負担をかけてばかり。居ないほうがよっぽど良かったらうといつも思っている。

(でも——もう一度、会いたい)

胸に下げたままの銀のブローチをなんとなく手で弄んで。

音楽も何も無い、ただ星明かりだけが照らすダンスを思い出す。ちゃんと名前も知らないあの人のことを。

このままベッドに転がっているには、きっともう会えないだろう。会えるとしたら、この魔法をなんとかした時だけ。

ただ、楽しかった。

怖がらないとか、穏やかな優しきとか、理由はよくわからないけれど。わたしがいてもいいのだと、そう思えた。

だから。だから——変えたいと、変わりたいと思った。

もう一度、会えるのなら。

(……………がんばろう。がんばって、みよう)

まずは、挨拶くらいから。

今度会えたらちゃんと挨拶くらいはできるようにならないと。

ちやうど朝食を持ってメイドのマーサがやってきてくれる頃合いである。それこそ赤ん坊の頃からお世話してくれているマーサにすら挨拶できないようではどうにもならないと、引きつったままの自分の顔をグニグニとほぐし。

いつもどおりの時間、丁寧なノックとともにマーサが現れた。

いつもと変わらない……………最近ちよつと白髪が増えたかもしれないけれど、ともかく優しい笑顔を浮かべて礼をした。

「おはよう御座います、お嬢様」

「……………おはよう、マーサ」

やっぱり笑顔のつもりが引きつった顔になった気がする。マーサも硬直しているし。止めておけばよかったかも、と思ったのもつかの間。急に涙を浮かべたマーサが一步近づいてきたので慌てて下がる。

それを見てマーサも立ち止まってくれたけれど、まさかそんな反応になると思っていなかったのどうしていいのかよく分からない。

「……ああ、お嬢様……申し訳ございません。ですが、本当に良かった」

「え、つと……。ごめんね、しゃべれないわけじゃ、なかったけど」

できるだけ離れていた方が、嫌われても気にしなくて済むと思っていたから。返事もしないし、できるだけ顔も見せなかった。でも、本当はそれでも離れていかないと思っていたのかもしれないけれど。

「いえ、いいえ。いいのです、そんなこと。お嬢様のお声を聞けて、笑顔まで。どうして謝ることなどあるでしょうか」

「……その、笑顔、うまくできなくて」

「できておりましたとも！」

「そう、ですか？」

マーサのことは信頼しているけれど、ことこういうことに関してはマーサは甘い気がする。とはいえ、自信たっぷりには断言されているとなんとなく正しい気もしてくる。

なら、一応次に——……見た目は、魔力がこれ以上強くなっても困るので食事を増やす気にはなれない。それ以外の令嬢らしさ……令嬢らしさって、なんだろう。

物語ではいつも囚われのお姫様とか、勇者と結ばれるとかばかり。令嬢に必要なものと言われると……何だろう？

「マーサ。あの、令嬢らしくなるには、どうすればいいの？」

「お嬢様は立派な令嬢であられますが……」

「そうじゃ、なくて。……公爵家の娘として、恥ずかしくない令嬢なら」

「……そうですね、ダンスと家格によつて異なる礼儀作法、お茶会の差配も必要ですし、社交のためのお手紙の決まりやドレスの流行を抑えることも必要ですし、他の家の

特産品や家系、派閥も覚えておく必要がありますし、歴史や詩に詳しいことも高貴な方と話される場合には必要でしょう。勿論淑女の嗜みとして刺繍や編み物もできねばなりません。ああ、古代語の読み書きもできると良いですね」

え、つと。

ダンスと、礼儀作法と、手紙、流行、特産品に家系と派閥、歴史と詩と刺繍と編み物そして古代語…。

(……………おおい、です)

やっぱり、無理かもしれない。

いやでも、せめて礼儀作法くらいは……………むう。

「……………マーサ、お屋敷にある分だけでいいので、本を持ってきてもらってもいいですか？」

「もちろんでございます、お嬢様」

そう言つてマーサは朝ごはんを並べると、軽い足取りで部屋を出ていつて。

フィリアは朝食のパンを一口かじると、こみ上げてきた吐き気に顔を顰めた。

(……気が重い、です)

食べれば魔力が強くなる。

そんな強迫観念から殆ど食べ物が喉を通らなくなり——あるいは戻してしまふようになって、もう何年だろう。

無理はしない。

でも、ちよつとだけ食べよう。

わたしだつて、可愛くなりたい。

身内以外に言われたのは、初めてだった。可愛くなれるつて。

お世辞かもしれない。でも、信じてみたい。

そうして一向に食べ物を通らない喉と格闘していると、マーサが本を持ってきてくれ

て。

とりあえず持つてきてくれた数冊の礼儀作法の本に、フィリアは目を細めた。なんと
言つても『高位貴族向け』『中位貴族向け』『下位貴族・その他向け』と分けられている
のにも関わらず、高位貴族向けが一番に分厚い。

軽く捲つてみると、礼及び答礼の仕方・種類が対象別に並んでおり。高位貴族が王族
に、あるいは高位貴族、中位貴族、下位貴族に行う礼の種類とそれぞれの使用例などが
書いてある。

「……あの、マーサ。これ、高位貴族だけでも……」

「いえ、お嬢様。もし下位貴族が礼を間違えた際にそれに気づけないようではいい笑い
ものになってしまいますので」

「そう、ですか」

令嬢つて挨拶のスペシャリストだったんだらうか……。

そして全く礼儀作法を知らないわたしって一体。

そしてあの人がどんな身分なのかも知らないので、フィリアは全部の礼を覚えなはいけないことに気づいて————マーサが貴族名鑑なる、似顔絵つきの分厚い辞典を持ってきたところで目を剥いた。

「あの、それ……」

「勿論、顔と名前を一致させなくては意味がありませんから。最終的に顔写真を見たら正しい礼ができねばなりません」

「（似たような）おじさんだらけですけど……」

「あつ。勿論、お嬢様は覚えずとも構いませんから！ すみません、このマーサ少し気持ちが昂ぶってしまつて」

そういえば、マーサは礼儀作法の先生をしていたことがあると聞いたことがあつた。

なんとなく、断るのも忍びなくなつたフィリアは、もしかするとこの前の人（かそのご家族）の似顔絵もあるかもしれないと気持ちを奮い立たせて本を開いた。

「あいつは一体何をしてるんだ」

玉座でまたしても国王が頭を抱えていた。

宰相として、学生時代からずっと彼を支えてきたハンスだが今回は掛ける言葉がない。

ついこの前、長男である第一王子の魔法が王として即位するには不足なものだった時は落ち込む彼に現実を見せるため側室の必要性を説いたりはした。

で。その肝心の第一王子は落ち込んだかと思えば突然精力的に動き出し。割と社交家とは関わりの薄いエンデミア公爵家の令嬢との連名で何故か魔道具の論文を上げ。自分と同じく魔法の不適格で困っていたドレス職人の跡取りを雇って全く新しいドレスをぶち上げる始末。

で、それにエンデイミアのご令嬢が乗ったものだから社交界に激震が走り。あまつさえ他家の令嬢と盛大に「やりあった」という噂すらある。お陰で完全に後継者争いから脱落したはずが、妙な存在感をにじませてしまっている。

もちろんそれが駄目なわけではないのだが……。変にどこかの派閥に取り込まれたりする余地を出すくらいなら、大人しくしてくれていた方が楽だったのは間違いない。

味をしめたわけではないと思うが、魔法関係で困っている職人なんかを自分の小遣いで支援していると聞く。芸術家のパトロンなら貴族のたしなみだが、職人は流石に聞いたことがない。

一番まずいのは四代公爵家の令嬢と何かつるんでいることだったりするのだが。

魔法力的にも、それによる政治力的にも公爵家は無視できる存在ではない。四つも公爵家があるラグノリア王国はそれだけ強力だが、その分だけ権力は王家と公爵家で分散しているのである。

つまり、ちゃんとした跡継ぎのいない状況で公爵家に天秤が傾くと下手すれば王家が国ごとひっくり返る。

が、別に悪事を働いているわけではないルークを叱責するわけにもいかない。むしろ父親としては好きなようにさせてやりたい。しかし王としては何もしないわけにも…。

「……………やはり、学院に放り込むか」

王家の人間はおおよそ王都にある王立セントリア学院に入れられる。

魔法が殆ど機能していないルークを入れるのはどうかと思つて躊躇していたが、下手に何かされるくらいなら学院の中の方がまだ制御ができる。少なくとも公爵家とか、魔道具研究所とか、王都市民とかに影響が大きいことをされるよりずっと良い。

「いや、だが。だがしかし」

「迷っているのならば、拙速に決めるべきではないのでは？」

とはいえ、やはり学院での人間関係には苦難が予想される。

この時躊躇してしまった王が、しばらくしてやつぱり頭を抱えることになるのはまた

第7話：第一王子と完璧な令嬢

「———どうですか」

「ああ、似合ってるな」

拗ねたような顔で、エンデイミア公爵家のシンボルカラーである黄色いドレスに身を包んだのはヴィーヴィル・エンデイミアであり。

そのドレスこそはルークがドレス職人と作った、流行とは真逆を往くシンプルなドレスである。

魔法に物を言わせたレース山盛り、大型化という進化を繰り返してきた流行のドレスに対して、レースの数を絞ることで魔法が使えなくなるともなるとかなるようには。

騎士の礼服に少し寄せたようなデザインは、動きやすさを確保しつつも流麗さを印象づける。金と魔法で盛りまくったドレスに対して、アイデアとデザインで勝負していると言えなくもない。

一番の特徴は、魔力を流すことで魔力耐性布が薄い光沢を帯びたような独特の光り方をするとところにあるのだけでも。

並の令嬢ではそのシンプルなデザインから貧相なドレスだのと陰口を叩かれるかもしれないが、公爵令嬢のドレスに文句を付けられる相手などそうはいない。そもそもヴィーヴィルの素材が良いのも相まって、それなりに令嬢を見てきたルークからしてもよく似合っていると思う。

「布が少ない分、体型も出るしな。踊った時の見栄えのためにスカートを大きくするのは盲点だったけどなんというか——カッコいいな」

「……………そうですか」

スツと顔を背けるヴィーヴィルに、何か気に障ったかとちよつと遠い目になるルークだが、直接聞くのも紳士としてアレなので、とりあえずエスコートするべく手を差し出

す。

「じゃあ、行こうか」

「それより、いい加減に名前でご呼んでください。言いにくいならヴィーでもいいです」

「いや、別に言いにくいわけでは——」

「ヴィーで、いいです」

ルークもなんとなく気恥ずかしさは感じるものの、せっかく協力体制を取っているのだから不仲だと思わせるメリツトもない。

この魔力耐性布のドレスを流行らせることで、誰が着けていてもおかしくない風潮を作る。ついでに魔法でドレスを作れないドレス屋を救済しつつ、開発者であるヴィーの名声も上げる。実質的に一石三鳥なプランである。

「でもアレだな、ヴィーは研究所とは大分雰囲気が違うような」

白衣を着て、研究に夢中になっていた時と比べると、ちよつと気怠そうな雰囲気が無

くなくなって隙のない令嬢に見える。

「私をなんだと思ってるのですか。私だって、両親に恥ずかしくない程度には令嬢らしくできます」

「……お、おう」

研究室に籠もりきりなのは令嬢としてどうなんだ、と正論が頭を過る。が、ヴィーが現状は隙のない令嬢っぽいのは事実。なので本音は飲み込んで建設的な話をしようと言口を開いた。

「で、なんで茶会に呼ばれたんだ俺は」

「分かってないのに聞いてこなかったのですか……」

ジト目で睨んでくるヴィーは隙のない令嬢というにはアレだったが、ルーク個人としてはこれくらいの方が愛嬌があって良いと思う——まあ、外面が完璧だからこそかもしれないが——ともかく、何か知らないが呼び出されたのでこのこやってきたのが今のルークであった。

「いや、まず宣伝でもさせられるのかなというのが一つ」

「分かっているではないですか」

なんで分かっているのに惚けたんですか、と得意げなヴィーの顔に、ちよつと悪戯しくたくなったルークは真顔のまま思ったことを言い放った。

「エスコート頼める友達がいまいかなというのも一つ」

「……………」

「実際のところは多分両方だと——」

「ルークも友達いませんよね」

「……………」

「……………」

ジト目のまま冷たく吐き捨ててきたヴィーとなんとなく見つめ合う。そして、虚しく

なって互いに視線をそらした。

「オレ、ヴィーと、トモダチ」

「そうですね。トモダチですね」

とりあえず宣伝担当なのでエスコートは不要なのだろう。と思ったが、無言で差し出された手を取る。まあ、やっぱりわざわざ不仲アピールする必要はないわけで。

「では、行きましょうか。お嬢さん」

「……………ルークも、そうしていると王子っぽいね」

伊達に完璧な王子を目指してきたわけではないのである。まあ無駄になったけど。

……………

……………

：

王都にあるエンデミア家の別荘、別荘というのは些か立派すぎる屋敷にて。あくまで親しい間柄の貴族を招くという名目で開かれたお茶会であるが——実際に集められた面々を見れば、流通やら貿易やらで利権を握っている家の令嬢が殆ど。

まず間違いなくどの令嬢たちも、ヴィーの目的くらいは察していることだろう。

独特の光沢を放つ新素材であり、魔力耐性で身の安全にも寄与する——令嬢が危険な場所に行くとは思えないので、その点はどちらかという兵士向けな気がするが——
—新作ドレス。

独特の美しい光沢だけでも売れそうではあるのだが、ヴィー曰く「こういうのは有名な人が着てると宣伝効果が高い」とかで。

そのヴィーが今回ターゲットに選んだのが——。

「ごきげんよう——お久しぶりですわね、エンデミアさん」

「あら、ごきげんよう。イルミリスさん。今日も素敵なおドレスですわね」

現れたのは黒髪に琥珀色の瞳。均整の取れたプロポーションは既に美しい女性として羽化しつつあるイルミス公爵家の令嬢。まだ社交デビューも果たしていないにも関わらず、圧倒的な知識、教養、おまけで美貌と爵位を誇り、既に同年代の令嬢たちのボスとして君臨しているリュミエール・イルミスだった。

実のところ、魔法が明らかになる前は婚約者候補筆頭だったのだが——母の血筋から敬遠されていた経緯があり。ぶっちゃけると苦手な相手である。見た目はとんでもなく美人なのだが。

ちなみにさっきの挨拶を令嬢風に翻訳すると多分こうなる。

『貴女がこんなお茶会を開くなんて珍しいですわね、いつも引きこもっているのに（ルーク訳）』

『引きこもってる相手より古いドレスを着てる人に言われたくありませんわ（ルーク訳）』

なんだろう。

表面上穏やかに見えてバチバチと火花が飛び交っているのが見える気がする。

軽く嫌味を飛ばしたら思い切り喧嘩を吹っかけられた（と思われる）リュミエールは、穏やかな顔のままヴィーのドレスを見て僅かに目を細めた。

「成程、確かに見たことのない上品な光沢です」

そのまま、何を言うかと身構えるヴィーに対して、少し考え込むような顔で黙り込むリュミエール。なんで宣伝してもらうのに丁々発止のやり取りをしないといけないのか、ルークとしては甚だ疑問なのだが、そうする必要があるというのならそうなのだろう。

と、ちよつと他人事のような気持ちで見えていたのが悪かったのか。

リュミエールが不意にルークに顔を向けてドレスの裾を持ち上げて礼——カーテシーをした。

「すみません、挨拶が遅れてしまいましたわね。お久しぶりです、ルーク殿下」

「今日のところは俺はオマケだからな、気にする必要はない」

というか、できれば矢面に立たせてほしくない。

そんなこちらの想いを読み取ったのか——そうではないのか。リュミエールは、笑顔でこちらに話題を振ってきた。

「そうでしょうか。今回、殿下が布の開発に大きく貢献したと伺いましたが」

「いや、それはヴィー……ヴィル嬢の功績だ。俺は切っ掛けを与えたくらいのものだろう」

口を挟んだくらいでヴィーの努力を横取りしていくのは気が引ける。

そんな思いから放った言葉に、何故かリュミエールとヴィーの二人から鋭い視線を浴びた。

「……………国防にも関わる重要な素材です。謙遜は御身の為にもならないのでは？」

「閃きがなければ発明とは起こらぬもの。そこを謙遜されては研究者の立つ瀬がありません」

「うっ」

それはそうかもしれないのだが。

実際問題、今回はどこぞの魔力過剰令嬢でも着れるドレスを流行らせるのが目的なわけ。功績とかそういうのは発明者に回してほしだけ、なのだが。

どこか呆れた様子を見せようとしてもしない二人は視線を合わせ。剣呑な雰囲気収めたリュミエール嬢は扇を取り出すと先程までより柔らかな声で言った。

「まず上流層に流行らせて量産体制を作り、そこから末端に行き渡らせるのは良い判断ですわね。何処にでも価値のわからぬ者はいるものですから」

「……………え、ええ。まあ」

完全に目が泳いでいる。

リュミエールさん、ヴィーは多分そこまで考えていないんじゃないでしょうか。

「我が国の国威、そして国防のためです。イルミス家も協力は惜しみません。量産の
用途は？」

「回復魔法の使い手がいればある程度の品質は確保できますが。最高品質となるとルー
ク…殿下の協力が必要ですね。刻印機を動かしても、結局のところ最終的には魔力を流
す必要がありますから」

「そう、ですか。ではとりあえず、最高品質のシルクに刻印した場合も試して頂いても
？」

「……………えっ」

「最高品質の最新の品ともなれば、国交などにも有効ですから。勿論、*“悪用”*されない
ように細工は必要でしょうけれど」

「は、はい」

見た目、まだ幼さも残る少女二人が話しているはずなのだが。

完全に会話が研究所の職員とその運営している貴族になっている。

これがイルミリスの神童とも*“完璧な令嬢”*とも謳われるリュミエール・イルミリ

ス。視野が広く、流行や政治を心得ている——言ってしまうばそれだけのことなのかもしれないが、いづれ家を差配することになる貴族令嬢としては申し分ないのだから。

と、そのリュミエール嬢がこちらを向いたかと思うと笑みを浮かべて言った。

「宣伝用にお一つ頂きたいですが——いづれ男性用を扱う布石として、殿下の分も仕立てさせましょうか」

「え、いや——」

「それは発明者であるエンディミア家の方で用意いたしますわ。お手数をおかけするわけには参りませんもの」

「そうでしょうか。『協力者』として、イルミス家の方の方も是非見て頂きたいのですが」

「殿下には私も恩返しをしたいので、それには及びませんわ」

「俺は要らな——なんでもないです」

「どうやら何かしらの利権というか、マウンツの取り合いであったらしい。口を挟んだところ『黙ってろ』との強い圧を感じたためです。ごすごと引つ込む。」

「では、殿下に選んで頂きましようか」

「……それしかありませんね」

片や、見た目も美しく各方面に知識も深いリュミエール嬢。

片や、布に関して専門家だが服に関しては素人なヴィー。

どっちにやってもらおうか、と言われると非常に困る。

何が困るって角が立つのが一番困るのだが。

令嬢も舐められたら終わりなところが無きにしもあらずなので、此処は自分が泥を被るのが手っ取り早いだろう。

「では、先に父王のものを仕立てるように。勿論、王のものであるから双方協力して最高

のものに仕上げろ」

何もかもが退屈だった。

徹底的に管理された教育を終え、「完璧」になった先に待っていたのは目的の欠如。

結局の所、私はただの令嬢でしなくて。

これから大人になって、結婚させられて。するべきことはせいぜいが家の差配くらいなもの。

魑魅魍魎が跋扈すると言われる社交界はあれど、その前段階であるお茶会程度であれば公爵令嬢という地位があり、人脈と教養と情報網があればなんとかなる。

令嬢として完璧でも、できることは変わらない——それを唯一変えられるかもしれない存在が、王子だった。

王子妃、そして王妃。

国交にも携われる重要な役どころであり、令嬢の頂点と目される私が当然のように目指すと思われるもの。

逆である。

令嬢の頂点なのだから、当然のように向こうから求めてくるものだ。

あらゆる貴族が、私との婚姻を望んだ。公爵家に喧嘩を売る阿呆は少ないが、いないわけではない。父より年齢の離れた男からも婚姻を申し込まれた。

どうでもいい。

完璧な美貌を求めた。新しいものがあると聞けばすぐに試したし、開発もさせている。

完璧な知識を求めた。暇さえあれば本を読み、それでも分からないことがあれば調べさせた。

完璧な教養を求めた。複数の国の教育者を雇い、その全てを網羅した。

自分でいうのも何だが、欠点なんてものは性格、可愛げのなさくらいのも。何もかも退屈だという興味の欠如は、しかしそれすらも良いと男たちは言う。割と度し難い。

エンデイミアの令嬢は確かに有能だ。

魔力に強い新素材の開発、それは確かに素晴らしい。しかし兵士に行き渡らせるための方法は分かっていないと見える。

あくまでドレスとして、自らの権勢を強めるのには、令嬢としてはそれでいいだろう。

けれど、それ以上を求めるのなら――。

だから、王子に選ばせようと思った。

最初から分かっていたのか、さして驚く様子もなく静かに話を聞いていた彼に。鯛の尾より鯛の頭でいたいというのなら、エンデイミア嬢を選べばいい。

だが、私の実力を評価できるのなら私を選ぶだろうと。

だが、王のための献上品を協力して作れという。成程、それならば確かに協力することに違和感はない。だが、さして未練もなく。あつさりとして、自分への贈り物を断るなんて。

（——この人、私に興味がない？）

完璧な令嬢になったと思っていた。

けれど、およそ令嬢の最高到達点ともいえる王妃、それに必要な王子が興味がないというのなら。まだ、足りないというのだろうか。

教養、知識、美貌。

全て極めたつもりで、冷え切っていた心に僅かに熱が灯る。

(……悔しい)

ただの研究好きの公爵令嬢と一緒にさられる。
それで傷つくくらいにプライドが高かったことに今更ながら気づく。

(……絶対に、振り向かせてみせますから)

この不遜な王子に、絶対に目に物見せる。

リュミエールは、久々に闘志を燃やし始めていた。